

# とぎには、辛口

18

## ◆無心、無我、無欲



松本道介  
Matsumoto Michisuke

今から四十年近く前、三十代のはじめに二年ほどドイツでくらしした。留学ではなく、ドイツの大学に日本語教師として勤めたのである。

給料をもらうとなると所得税も収めなければならず、そのための書類を提出することになった。所得税の書類で日本と違うのは自分の宗教を書きこむ欄である。税金を収めるのになぜ宗教などがかわってくるのか。

実はドイツ、オーストリアと北欧三国には昔から教会税という制度がある。外国人であってもキリスト教徒と書けばプロテスタントであれカトリックであれ、所得税の九パー

セントというかなり高額な税金を払わなければならぬ。

むしろ我々はブッディストあるいはシントイストと書いておけば税金をとられないですむのだが、私はなんだか落ちつかなかった。お前は何教の信者か、などという質問は日本でくらししている限り決して受けることがない。そんな質問を受けて面くらってしまったのだろう。ブッディストというのは日本語だと仏教徒、シントイストは神道信者だが、私には

教徒とか信者とかいった意識がまったくない。私にとって仏教とは自分の家でおこなう葬式や法事のさいにやってくる坊さんが曹洞宗と

いうだけの話で、お経など一行も知らない自分が仏教徒などと書きこむのは妙に恥ずかしかった。

むしろ自分は無神論者だというのが本音だったが、ドイツでは冗談にも自分は無神論者だなどと言ってはならないという。なるほど アテイスト Atheist は独和辞書に無神論者と出ているけれども、神を否定する者といった意味であり、人殺しを平気でやる人間といった感じになるのだそう。

ところが日本では無神論者なんて平気で使える。仏滅の日に結婚式をやるとか、神社でお賽銭を出さないとといった程度ののんきな言葉である。

## 西洋の「ゴッド」と日本の「神」

今から四十年近く前の経験であるが、西洋というものの本質、それとともに日本文化の本質がどんな本を読んだときよりもよくわかった気がして、いまだに忘れられない。

その時こそ西洋のゴッドと日本の神がどれだけ違うものであるかも身にしみてわかった。つまりゴッドというのは信じる人にとって確かに存在するものであり、キリスト教徒とは

キリストを神として本当に信じている人たちなのであった。

他方、日本人にとっては神も仏もいるのかいないのかわからないし、いてもいなくてもどうでもいいものである。だから無神論者などという言葉ものんきに、笑いながら口にすることができるとなる。

となると、日本人は宗教を持たない民族なのかもしれないし、少なくとも西洋的な見方からすると日本人は何も信じていないように見えるだろう。

しかし私には日本人がきわめて宗教的な民族だと思われる。それでいて宗教的でないように見えるのは、日本人が無を信じているからだと私は考える。

## “無”を信じる

無を信じるなどと言い出すと、仏教ではないだのニヒリズムだのと難かしい議論に入るのではないかと用心されそうだが、そんな難かしい話をしようというのではない。

それに西洋系の無つまり nothing と東洋系の無はまったく違うものなのだ。nothing はただない、というだけの味も素っ気もない言葉

である。しかし、東洋の無はむしろ無限というときの無であるような気がする。

なるほど無という坐禅をするお坊さんたちの悟りの境地を思い浮かべると、ふつうの日本人は無の下に漢字を一字つけて使う。例えば無心、無我、無欲、無垢、無常という具合に我々は日常生活でずいぶん頻繁に使っている。ここぞというチャンスにクリーンヒットを打ったプロ野球選手が「無心で打ったのがよかった」というコメントを口にすることはよくあるし、無心とか無欲とか無のつく言葉をこれだけ気軽に使うのは日本人だけではないだろうか。

## 荒川静香の金メダル

とりわけトリノ・オリンピックの女子フィギュアスケート金メダルの荒川静香の場合は無心無欲による勝利の典型だった。最後のフリーの演技は、気の持ちようひとつで手の先、足の先から肩、首、腰、あれほどしなやかに、あれほど澁刺と動かせるものかという思いで見とれていた。解説でも、荒川はショート・プログラムの時の二倍も三倍もからだが動いていますと言っていたのが忘れられない。

荒川と反対に、ショート・プログラム一位のコーエンや二位のスルツカヤはフリーに入ってからいきらかにメダルを意識したようだからだの動きが目に見えて堅くなり、あげくの果てに転倒までしてしまう。むろん二人だって、メダルのことなど忘れて滑らなければならぬことはよくわかっていただろうに、それが出来なかった。

荒川とてショート・プログラムは三位なのだから、メダルを意識しない筈はないのに、自分はメダルがとれるとは思っていなかったと言っていた。どうしてそこまで謙虚になれたのが不思議だが、事実として荒川は無心に無欲に楽しげに演技していた。

トリノ・オリンピックでは、もう一人無心に無欲に演技した人がいる。男子フィギュアで優勝したロシアのプルシエンコで、彼の場合は自分が他の選手よりはるかにうまいことを自覚していて金メダルは当たり前、なんの心配もなく滑っている感じだった。

(中央大学名誉教授)